

チケットあれこれ

「音楽の都」と言われるだけのことはあって、シーズン中（九月一日から六月末まで）ウィーンではたくさんのお音楽イベントが催される。その気になれば毎日オペラが鑑賞できるのも、ウィーンならではのコンサート、オペレッタ、ミュージカル、等々迷いだしたら切りがないが、音楽以外にも大小の劇場での演劇などがある事も忘れてはならない。催し物はインフォメーションその他で無料配布している「プログラム」という月刊のパンフレットに詳しく掲載されている。

ところで、心配の種はチケットの入手である。馴れていないと、どこでどう手に入れるのが良いのか、人に聞くのも田舎者みたいだし……と、ついつい出かけるのがおっくうになってしまう。いつでもすぐ簡単にチケットが手に入るものは、ひょっとすると大したことのない公演ではないか、などと勘繰りたくなるのは人の常。事実、これはどうしても行きたい、と思うキャストのオペラなど、チケット入手が非常に困難な事が多い。

ここに旅行案内書には出ていないシークレット情報を御紹介しよう。

ウィーンにある「連邦劇場」、つまり国立の劇場（国立歌劇場・フォルクスオペラ・ブルク劇場・アカデミーテアター）で催されるもののチケットは、ただひとつの例外を除いて公演日の一週間前から売り出される。したがって、たとえば日曜日に上演される物の売り出し初日は、その一週間の日曜日となる。ひとつだけの例外とは十二月三十一日のシュターツオペラとフォルクスオペラのチケットで、これだけは公演二週間前の十二月十七日から売り出される。

前売り券の売場は国立歌劇場のすぐ西隣りの建物にある。ハーヌシュガッセの三番がその入口だが、ボックスオフィス（売場）は通りに面した入口から入って中庭を抜け、奥の左側にあるガラスの扉の所である。

立ち見のチケットは前売りされず、全て当日該当する劇場のカッサ（当日券売場）で売られる。

前売りボックスオフィスの営業時間は月曜から金曜は朝八時から夕方六時まで、土曜日は朝九時から午後二時まで、日曜祭日は朝九時から昼十二時までである。基本的には自分で出向いてチケットを買う事になるが、ウィーン市以外の地区や外国からの場合には公演二週間前まで、という条件で手紙にての注文も可能である。

人気のある歌手や指揮者が出演する時にはチケットもすぐ売り切れてしまうが、入手の際の一応のコツは、始発電車が動き出す前にオフィスに行つて並ぶ事。そうすれば大体チケットを手に入れることができるだろう。フォルクスオパーの場合はオフィスの開く一時間前までに並べばまず大丈夫である。

チケットの値段と座席の善し悪しとの釣り合いは非常にうまく考えられているが、バルコン、それに「ガント・ザイテ（最も端の座席）」以外のギャラリーなど、特に「一列目」にこだわらなければ比較的安い値段でも良く見える。非常な混雑が予想される場合に前もって整理券が発行される事があるが、これについてはオフィスに問い合わせるしかない。電話は五一四四四—二九五九または—二九六〇。

立ち見のチケットは当日買う以外に方法がない。前評判の良いオペラ（国立歌劇場）については開演の三〜四時間前から並びはじめると、ちょうど買えるか買えないかのギリギリの線となろう。普通のものならば直前でもチケットを入手できる可能性が大きいが、二時間前から並べば買えるのはもちろん、大体良い場所が確保できる。売り出しは開演の一時間前からで、一人一枚のみ。チケットの値段はパルテレ（平土間）の立ち見席が二十シリング、バルコンとギャラリーの立ち見席が十五シリングである。立ち見席の場合も、売り出す際の混雑が予想される場合には、前もって整理券が発行される。この整理券は普通は公演当日の朝六時頃に劇場の西側、オペルンガッセに面した入口で発行されるが、どの公演について発行されるかについての詳細は、一ヵ月分ぐらいまとめて入口付近に掲示されている。

立ち見席の場所取りは先着順であるため、チケットを買うやいなや階段を駆け登る事になる。シュターツオバーの場合、正面入口から入るといくつかの階段があるが、向かって一番左端の階段がギャレリー、一番右端がバルコン、右からふたつめ（バルコンへ行く階段のひとつ内側）の階段がパルテレの立ち見席に通じる。

立ち見席に着いたら、なるべく前の列の中央を陣取るのが得策だが、自分の縄張りを明示するためには手すりにハンカチやスカーフなどを結ぶ。手すりは並行している上下二本のバーを中心に、寄りかかっても大丈夫なように作られている。一番上、つまり寄りかかった時にひじの支えにもなるバーは、太めで布が巻かれている。ここに目印として結んだハンカチは、場所取りのルール違反として無効になる事があるため、一本下の鉄のバーにハンカチを巻く事をお薦めする。こうして席の確保さえすれば、劇場の外に出て食事をすることも自由である。

パルテレの立ち見席はステージを見るのには最高である。音が一番良いのはギャレリーの立ち見席。バルコンの立ち見席は音はあまり良くないが、見やすいのと比較的すいている事で、案外のお薦め品かも知れない。

開演十五分前になってもまだ座る席のチケットが余っている場合、二十六歳以下の学生は学生証を提示すると残券を一律五十シリングで買う事ができる。パルテレのど真ん中、という事もあるので「どうせ立つから」とあまり汚い恰好をしていくと、非常に肩身の狭い思いを味あわされる。

ところでシュターツオバーの立ち見席、及び学生用残券を手に入れるには前述の劇場西側、オペルンガッセにある入口から入って並ぶのだが、入口付近では混沌としていても、最終的には立ち見席の列と学生用残券の列とに分かれる。その際、列の後方から見て右側、電話ボックス付近から始まっている列は学生用残券

を待つ列なので要注意。間違えてここに並んでいると、立ち見のチケットを買いそびれてしまう事にもなりかねない。

座る席の当日券は、開演一時間前から立ち見席用のカッサの反対側、ケルントナー通り側にあるカッサで手に入れる事ができる。国立劇場のボックスオフィスやカッサではキャッシュカード（アメックス、ダイナース、マスターカード、ビザ、オイロカード）も使用できる。ただし立ち見の券は現金引換えである。できれば釣銭も不要となるように、コインを用意した方が良い。

ガルデローベにはオペラグラスも用意されており（ただしあまり高性能ではない）、コート等を預けた場合には十二シリングで借りる事ができる。単にオペラグラスだけを借りる場合には数百シリングのデポジットが必要。

シュターツオペアのケルントナー通り側には楽屋へ通じる入口がある。チェックが厳しくて中へは入れないが、公演後ここで待っていると歌手にサインしてもらえるチャンスがある。

フォルクスオペアの立ち見席は一律十五シリングである。どこに立っても良く見えるし良く聞こえる。お勧めはギャレリー立ち見席の一目目で、ここは階段になっているため、疲れた時など腰を下ろす事が出来る。

年に十回（コンサートそのものは土日二回公演なので計二十回）催されるウィーンフィル定期演奏会のチケットは、先祖代々からのウィーンフィル会員が会場の全席を留めているため、公式にはどのコンサートも全て売り切れである。しかし通常は毎回会員からのキャンセル申し出があり、その券に限って売り出される。売場はムジークフェラインのインペリアルホテル側にある木の扉を押し開けて入り、左側にある守衛室手前

を左に折れて奥（突き当たり）の階段を上がった所にあるウィーンフィル事務所（☎五〇五六五二五）である。事務所は月曜から金曜までは朝の九時から十二時と午後三時から五時半、それに土曜日の午前中九時から十二時まで。

このキャンセルチケットを手に入れるには、まず該当する定期公演直前の月曜日（月曜日が祭日の場合は火曜日）に事務所に連絡し（電話で構わない）、ウェイティングリストに名前を登録してもらう。その後木曜日あたりに問い合わせるとチケットの有無などを教えてくれるので、取りに行く日や方法を定める事になる。申し込み後いつごろ問い合わせるべきかは、最初の申し込みの時に教えてくれる。

チケット申し込みは一人四枚まで。ただしキャンセルチケットの数があまりない、と予想される際には、一人二枚に限られる事もある。いずれにせよ最初に申し込みの際にチケットの値段のおおよその希望なども伝えておいた方が良いでしょう。外国からの国際電話も受け付けてくれるし、期日に間に合えば手紙での申し込みもできる。ただし手紙申し込みの場合も、電話での「問い合わせ」は行わなければならない。立ち見席のキャンセルも出る

	営 業 時 間	電 話
国立の劇場	月～金 午前9時～午後6時 土 午前9時～午後2時 日祭日 午前9時～12時	514444-2959 514444-2960
ウィーンフィル	月～金 午前9時～12時 土 午後3時～5時半 午前9時～12時	5056525
ジュネス・ムジカル	月～金 午後5時～7時半	5056356 (予約不可)
ムジークフェライン	月～金 午前9時～午後6時 土 午前9時～12時	658190 (5058190)
コンツェルトハウス	月～金 午前9時～午後6時 土 午前9時～午後1時	7121211

事があるので「立ち見希望」も可能である。

立ち見席だけは、毎年九月にシーズンを通してのチケットセットが一般に売り出される。販売日はシーズンの初めの定期演奏会直前の日曜日、という事になっているが、一応前もって事務所に問い合わせるのが望ましい。

一月一日のニューイヤークンサートチケットを手に入れるのはなかなか至難の技だが、ルールを御紹介しよう。

数少ない余剰（キャンセル）券販売には、たとえば一九九一年一月一日のコンサートについてはその前年、九〇年一月二日に事務所に配達される、郵便を介しての申し込みのみのベースとなる。一月一日は祭日で郵便配達がないから、「速達」を上手に利用したり毎日一通ずつ出してみたり、何らかの方法は考えられよう。ただし差出人の住所がウィーン市内ではその申し込みは無効であり、ウィーン市外、または外国からの手紙のみが受け付けられる。受け付けられると言っても、実際にチケットが手に入るかどうかは運を天にまかせるしかない。

十二月三十一日のジルベスターコンサートも申し込みの方法はニューイヤークンサートと同じであるが、こちらの方は差出人がウィーン市内の住所であっても差し支えない。

このムジークフェラインの守衛室向かいの階段を数段登ると、ムジカリッシェ・ユージェント（リジユネス・ミュージカル）の事務所がある。ここ管轄のコンサートも結構良いものがたくさんあるが、安いチケットを年齢の若い会員に優先的に売るのがこの団体の仕事であるため、残券はいつも比較的少ない。チケットが余っている場合には、この事務所で月曜から金曜の夕方五時から七時半の間に買うことができる。一カ月前

の公演のチケットまで手に入れられる。電話予約はお断り。

ムジークフェラインで催される普通のコンサートのチケットは、この建物のカールスプラッツ側にある前売り場で手に入る。業務時間は月曜から金曜までは朝九時から夕方六時まで、土曜日は昼十二時までである。前売りはいっから、という規定は特にない。電話で予約する事も可能であり（☎六五八一〇または五〇五八一九〇）、チケットの団体予約などかなりフレキシブルに相談に乗ってくれる。立ち見席も前売りで買える。

三百シリング（一九八九年現在）払って会員になると「アボンヌモン」というシリーズ券（たとえば室内楽シリーズ、世界のオーケストラシリーズ等々）が割引料金にて手に入る。この会場で音楽祭が催される年には、会員になっておくとも音楽祭関係のチケットを通常売り出しより早めに買うことができる。

開場と当日券の売り出しは公演三十分前から。ウィーンフィルの定期などを立ち見で聞く場合には、人より少しでも早く立ち見席に駆け上がりた、と気がせくが、正面の入口の鍵は、どうも向かって一番右端の扉から開けられる事が多いようである。せっかちの人はこの右の扉の前で待っている事。

チケットは持っていないが立ち見で構わないので何とか入れてほしい、という時に、切符もぎりのおじさんにチップ（五十から百シリング程度）を握らして目をつぶってもらう、という方法は最近とみに困難になった。こういった、言わば不正行為が数年前新聞沙汰になった事があり、それ以来おもて立ってはどこでもやっていない。ムジークフェラインの場合も、もしチップを貰った事がもぎりの元締めに知れると、その人は即日解雇になるそうだ。

比較的效果を発揮するのは、プログラムを買う際にチップをはずむ事。バルコンなどでは前列に空席があったりするとそこに案内してくれたり、立ち見にいても座席に案内してくれたりする事がある。ただしこれもプログラムを売る人の性格にもよるが、「チップをはずむ」とは、最高おおよそ二十シリングぐらい多めにあげる事を意味する。それ以上あげてもあまり効果はない。

コンツェルトハウスもチケットをかうシステムはほぼ同様だが、こちらの方は少し規則が厳しい。前売り場は建物の左端にあるが、月曜から金曜までは朝九時から夕方六時まで、土曜日は昼一時まで開いている。

五百シリング（一九八九年現在）出して会員になると、普通の人には公演の三週間前からしか買えないチケットを四週間前に買うことができる。前述のシリーズ券も割引きとなる。音楽祭のチケットも早めに買える。ただし音楽祭のチケットはそれだけ別にまとめて販売される。

当日券は開演三十分前から。最近新しい試みとして「シュプリンガーカルテ」という名のチケットが、開演直前に当日券売場より発行される事がある。これは前売りのシリーズ券保有者が来場せず、帳簿の上では売り切れになっているのに会場に空席が目立つ時、この空席を少しでも埋めるために発行される格安のチケットである。これを買うと、空いている所ならばどこに座っても構わない。従って「チケット売り切れ」のコンサートでも最後まであきらめずにいると、中に入れる可能性がある。特に天候が急変した時などはチャンスかも知れない。尚、この会場に立ち見席はない。

会員はウィーン市内からでも、非会員はウィーン市外からに限り電話でのチケット予約ができるが（六七二二二二）払い込みは前もってせねばならず、「当日精算」は御法度である。

ミュージカルのチケットはそれぞれの劇場で前売り販売しているが、かなり先の日程まで売り切れている場合が多い。ただオペラなどと違って連日同じ出し物であるため、特に日時を指定さえしなければ大丈夫だろう。

街のチケットビューローに頼むのも簡単で良いが、一枚につきチケット代金の二十二パーセントにあたる手数料が加算される。無理を言って別のチケットビューローから買いつけてもらうような事になると、二十二パーセント+二十二パーセントで合計四十四パーセントの割り増しになる事がある。今流行のミュージカルのチケットだけは、手数料が三十パーセントを越す事も覚悟しなければならない。

大きなホテルでもチケットをとってもらえるが、値段の上限を明確にしておかないと、時々とんでもない値段のチケットを買わされる羽目に陥る事がある。特に音楽祭開催中のザルツブルクのホテルでは注意を要する。

どうしてもチケットが手に入らなかったコンサートでも「SUCHE KARTE (切符求む)」と書いた看板を持って会場の入口で待っていると、キャンセルのチケットを個人的に売ってもらえる事がある。

グッド・ラック！